寝取られ幼馴染
～春花と千夏～
春風栞
イラスト:108号
ぷちぱら文庫

● 登場人物

かやはらはるか
茅原春花

私立鴻学園3年5組に所属している女子生徒。純情で恥ずかしがり屋で、いやらしいことは苦手なのだが、性に対する好奇心は強い。背は低く身体は小さいけれど、胸はかなり大きい。ずっと幼馴染に淡い恋心を抱いていたのだが、その恋愛への憧れと、異性に対する好奇心の強さを家庭教師に看破され、うまく利用されてしまった。

春花編　第一章　踏みにじられた純情 …… 5
春花編　第二章　知らぬが幸福 …… 84
千夏編　第一章　青春の喪失 …… 137
千夏編　第二章　終わらない絶望 …… 199

「すごい……イッたと思ったのに……またイッて……ちょっと怖かった……」
「ごめんね、無理させちゃったかな」
「いえ、先生が、ぎゅっと抱きしめてくれたから、あれで、すごいのが来ちゃって……」
「ふふっ……そうか。ありがとう……春花は、心を全部俺にくれたんだね」
「心……？」
「ああ、そうだよ。だから、あんなに気持ち良くなれたんだ」
そうして、腰砕けになっている春花を抱きしめる。
「あ……♡」
春花は心から芳沢を愛しているような様子で、その胸板に顔を埋めた。

「はい……わたし……心……先生のもの……♡　ああっ……秀人さん……ちゅ……ちゅむ、ちゅ……ちゅう♡」
再びディープキスを重ねるふたり。その激しさは恋人同士のものだった。
（……見るんじゃなかった。こんなの知らなければよかった。……こんな所に忍び込むなんて馬鹿なこと、しなければ良かった……）
貴史の心を、後悔だけが支配していた。しかし、悪夢はまだ終わらなかった。
「……じゃあ、今度は……」
芳沢は甘える春花を、腰の上から床に下ろすと。おもむろに、ズボンを脱ぎ始めたのだ。
「今度は、僕を気持ちよくしてくれるよね？」
芳沢の隆々と勃起したペニスを見て、貴史は思わず息を呑んだ。グロテスクに血管が浮き出ていて、大きさも自分のそれよりも二倍近くありそうなのだ。
エラ高で反り返っていて、まるで女性器を陵辱するための凶器のようにすら思える。
「ああ……すごい……♡」
だが、春花がペニスに向けた視線は貴史の予想しないものだった。
「この前は手でシゴくところまで教えてあげたよね？」
「は、はい、気持ち良くなると大きくなるって……オチンチンのこと、お勉強しました」
「そうだよ。今、春花がイッてくれて、僕はとっても嬉しくて、こうなったんだ。それじ

や、まずは復習だ、この前みたいに触ってごらん？」
春花は小さく頷くと、手を伸ばし、あっさりと芳沢のペニスに触れた。そして、教え込まれたとおりに手を上下させる。
「あ、ああ……気持ちいいよ……」
大好きな幼馴染が、他人の肉棒を愛撫する様を見るのは、辛かった。それでも、貴史は自分のペニスを硬くしながら、その光景に見入ってしまっていた。
「フェラチオって知っているかい？」
「あ……そ……それはその……」
問いかけた芳沢のペニスを握ったまま、春花は頬を真っ赤にして顔を逸らした。しかし、視線だけは亀頭から離さない。
「フフ、そう……。これを口で咥えるんだよ。舐めたりしゃぶったり吸い付いたり。そんなに難しいことじゃないよ」
「で、でも、ここって、オシッコするところですよね……」
「そうだね」
「だったら、やっぱり……その……」
さすがに抵抗があるのだろう。貴史の知る限り、春花には少し潔癖症なところがあった。ここで春花が拒絶すれば、今まで順調だったふたりの関係にもヒビが入るかもしれない。

（……そうだ。春花が嫌がって――拒絶して、悲鳴を上げて、助けを求めてくれれば！　そうすれば、俺は動ける。春花を助けるために飛び出せるんだ……！）
起死回生のチャンスに、貴史はわずかに力を取り戻した。そうすれば、芳沢は家から追放されて元の生活に戻れる。
「……まあ、無理強いはしないよ。春花の嫌がることは、したくないからね……でも、やってくれたら、すごく嬉しいんだけどな……」
芳沢は子猫を撫でるように春花の頬に手をあてて、ゆっくりとくすぐった。
「先生……ん……はぁ……」
「……でも、そうか、残念だよ。僕は、

春花の気持ちよくなってるところ、すごく綺麗だと思った。かわいかった。だから、こんなに硬くなった。嬉しくって、春花が大好きになって……だから春花にしてもらえたら最高だろうって思ったんだけど……」

そこで、芳沢は言葉を区切った。貴史の心に嫌な予感が広がった。

「それは僕の、一方的な気持ちだったんだね……」

「……え？」

芳沢の言葉に、たやすく春花は反応した。目を丸くして、一瞬後には、不安そうな表情になる。その顔は「先生に嫌われたくない」と言っていた。

「すまない、ちょっと愚痴っぽかったな。忘れてくれ」

それでも芳沢は心にもないことを言った。その様子に、春花は戸惑いの色を見せる。

「じゃあ、今日の勉強はこのくらいにして……」

「せ、せんせい……！」

立ち上がろうとした芳沢に、春花は必死の形相でしがみついていた。

「や、やります！　わたし、やりますから！」

一瞬、芳沢の口元が緩んだのは気のせいだったろうか。

「でも……君はたかくんがいいんだろう？」

「違います！　絶対違います！」

再び名前を出されて、嫐られる。全力で否定する春花の言葉に、貴史の精神はズタズタにされる。

「そ、その……先生が心配してるみたいに、たかくんとは……お友達としての関係は深いです……でも、逆に言えば、たかくんはただのお友達なんです……！　長い間一緒にいるけど、たかくんの前じゃ、わたし、女になれなくて……。だけど、先生は……わたしを女にしてくれて……先生の前だと、わたし、本当に、わたし……好きなのは先生だけです……信じて下さい……！」

最後には涙すら浮かべて、春花は芳沢に告白をしていた。

芳沢はというと、してやったりという笑みを浮かべて、春花の肩や背中を撫でさすった。

「ありがとう。じゃあ……してくれる？」

「……は、はい♡」

誘い込まれ、丸め込まれて、勢いのままに春花は、ついさきほどまで躊躇っていた行為を自ら受け入れた。

「だけど、下手だったらごめんなさい……」

「大丈夫、やり方は教えてあげるよ。まずはチンポの先……亀頭って教えたよね？　そこにキスしてごらん」

「……はい。れちゅ……ん……」

こわごわといった感じで、春花は亀頭に舌を這わせた。
「くっ……」
すると、芳沢が呻き、ペニスがむくむくと起き上がってくる。
「ああ……先生……！」
硬さを増すペニスを見て、春花は嬉しそうな顔をした。貴史は、もうそんな春花の顔を何年も見ていない気がした。いや、もしかすると、出会ってから今までこんな嬉しそうな顔を、自分に向けてくれたことはあっただろうか？
「ん……いいよ。続けて……」
「はい……れろ……ちゅ……ちゅ……ちゅっ……」
もう春花に迷いはなかった。教えられるままに従順にフェラチオをする。可憐な面差しとグロテスクなペニスのコントラストが妙にいやらしくて、貴史の股間も熱くなる。
「もっと舌を動かしてくれるかい？　先の膨れたところをソフトクリームみたいに、舐め上げたり……ううっ」
「はい……ん……れろぅ……れろ……れろ……」
「ああ……う……く……、春花の舌使いは最高だな。愛情が伝わってくるよ……」
「ん……はぁ……そう……ですか？　嬉しい♡　れろれろ♡」
褒められて嬉しいのか、おっかなびっくりだった春花の舌の動きが大胆になっていく。

少女から、女になっていく。それも、幼馴染である貴史の、目の前で――。
「れろぉ♡　れろぉ♡　れろぉ♡」
「いいよ……すごい。たまらない」
芳沢は春花の頭を撫でながら、フェラチオ調教を楽しんでいる。それなのに、貴史は隙間からその光景を見て股間を硬くすることしかできない。
「じゃあ次は……根元からしてみてくれるか？」
「ひゃい……ぺろ……ねろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉん♡」
熱を帯びるフェラチオ指導。
「いいよ春花……上手だよ……じゃあ今度は張り出た傘の裏側を舐めて……うく……そ、そうだ……っ、男はそうされるのが気持ちいいんだ。……春花は筋がいいな」
「んふっ……れろ、れろれろ、ちゅぱ、ちゅく……ぴちゅ、じゅっ、ちゅぷ、じゅるっ」
春花は恋人同士のように目だけで笑うと、嬉しそうに舌を動かした。
もう、完全にふたりの世界だった。
ぎこちなかった舌使いが滑らかになっていき、春花のテクニックが急速に上達していく。
「んふ……ふあぁ……すごい……」
春花は恍惚の表情で、硬く反り返った肉棒を見つめた。
「どう？　俺のチンポの味は」

ぷちぱら文庫

寝取られ幼馴染
～春花と千夏～

2011年 12月22日　初版第１刷 発行

■著　　者　　春風栞
■イラスト　　108号
■原　　作　　ORCSOFT

発行人：久保田裕
発行元：株式会社パラダイム
〒166-0011
東京都杉並区梅里2-40-19
ワールドビル202
TEL 03-5306-6921

印 刷 所：中央精版印刷株式会社

本書の内容を無断で複製･複写･放送･データ配信などをすることは、
かたくお断りいたします。
落丁･乱丁はお取り替えいたします。
定価はカバーに表示してあります。
©SHIORI HARUKAZE ©ORCSOFT
Printed in Japan 2011
PP037

寝取主義者(ネトリスト)の
花嫁(はなよめ)弄(いじ)り!
婚約者があんな声で喘ぐのを兄貴は知らない
あなた以外のヒトと―つながっちゃったぁ…
ぷちぱら文庫36
田中珠 著
みかづあきら! 画
クレージュ 原作
定価 670円(税込)